The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	国費学部留学生予備教育における日本事情科目の学習項目について
Author(s)	加藤, 均
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2010, 8, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6797
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

国費学部留学生予備教育における日本事情科目の学習項目について

加藤　　均

【要約】

大学における日本事情科目は、1962年の文部省令第二十一号により、留学生教育の一環として設置が認められた科目であり、その教育内容・方法に関する研究は、1980年代以降、意欲的に進められ、現在では、文化リテラシー型授業といった提言も行われている。しかし、国費学部留学生予備教育における日本事情科目では、①受講者には日本語初級者が含まれること、②12月までの科目成績が大学進学の基礎データの一つとして使われるため客観的な到達度測定法が求められること、という二つの制約のため、同じような議論が進めることができない。実際、2002年度までは、この制約から、日本の地理に関する知識習得を重視した講義型授業が行われてきたが、受講生の知的好奇心を喚起することが難しかったため、文化的社会的事象に関する項目を取り入れた教授内容に変更した。しかし、この２，３年、内容的な古さが目立ちはじめ、また、より客観的な到達度測定が求められていることから、大学入学への準備教育という原点に立ち戻り、学部留学生進学配置大学を対象に行った教育項目調査（地理、現代社会関係項目）の結果、並びに高等学校「倫理」教科書の内容を参考として、日本事情科目における学習項目の再設定を試みた。

１．はじめに

国費学部留学生とは、文部科学省が在外公館で実施する現地選考試験を通過し、本省での最終選考において日本政府奨学生に採用された学部レベルの留学生のことで、「日本政府（文部科学省）奨学金留学生募集要項[学部留学生]」（以下「要項」と略）によれば、原則的には「最初の１年間、文部科学省が指定する日本語等予備教育機関に入学し、大学進学のために集中的な日本語教育その他の予備教育を受ける」ことになっている。理系・文系あわせて毎年120名程度の採用者があり、現在、大阪大学日本語日本文化教育センター（以下「本センター」と略）及び東京外国語大学留学生日本語教育センターの２機関に振り分け配置され、その教育が行われている。

この国費学部生予備教育における「授業の内容は、日本語教育を中心として日本事情、数学、英語、及び文科系は社会、理科系は物理・化学・生物等」（「要項」）と定められており、本センターでも、日本事情科目が置かれ、週１回、１コマ（90分）、１年間（37週）にわたり授業が行われている。また、社会系科目としては、文科系学生を対象に政治経済（週２コマ）、日本史（２コマ）も開講されている。

ここ数年、日本事情科目は、４月時点で日本語初級から中級レベルと判定された学生を対象としたクラスが同時並行に３クラス（各クラス15名程度）、加えて、高校時代に日本留学を経験した者など日本語上級者に対するクラス が１クラス設けられているが、ここでは受講者の多い前者を中心に、その学習項目について考察を進めていきたい。

１．これまでの経緯

さて、大学における日本事情科目については、1962年の文部省令第二十一号により、留学生

教育の一環として設置が認められた科目であり、その教育内容・方法に関する研究は、1980年代以降、意欲的に進められ、現在では、文化リテラシー型授業といった提言も行われているが、特に国費留学生予備教育においては、以下の２つの制約があるため、同じような議論が進めることができないのが実情である。

①学部教育における日本事情受講者は、１級レベル日本語運用能力が持ったものの主になるであろうが、予備教育における受講者には日本語初級者が含まれること。

②12月までの科目成績が大学進学の基礎データの一つとして使われるため客観的な到達度測定法が求められること。

実際、2002年度までは、この制約から、また、社会系科目として政治経済や日本史が教授されていることも考慮に入れて、日本事情科目では、日本の地理に関する知識習得を重視した講義型授業が行われてきたが、受講生の知的好奇心を喚起することが難しかったため、地理の学習は最初の１ヶ月で終え、それ以降は、これまで日本語上級者対象クラスで行われていた教授内容を大幅に取り入れたカリキュラムとし、教科書『学部留学生のための日本事情Ｉ』(2003)も新たに作成された。

この教科書は、当初は、(1)「国土と気候」、(2)「都道府県と政令指定都市」、(3)「大学」、(4)「大阪外国語大学」、(5)「見合い結婚」、(6)「パラサイトシングル」、(7)「ウルトラマンと仮面ライダー」、(8)「妖怪」、(9)「水戸黄門」、(10)「援助交際」の10節からなり、それぞれの節(「援助交際」の節を除き)の本文は、担当教員の裁量の余地を残すため、１乃至２頁におさえられていた。また、この使用にあたっては、３名の担当者が同時並行で授業を進めるために、９月初め、11月末、２月末に実施される試験を区切りとして、３期に分けた授業進度が定められた。

第１期(４月から７月末　試験は夏期休暇明けの９月初めに実施)

４月時点では日本語未習者もおり、(1)と(2)の地理的地域的事象を取り扱う４月から５月末までの約２ヶ月間は、英語と日本語と併用で授業が行われた。その後、学部留学生の関心事である日本の大学についての情報を、地理的な知識と関連づけながら(3)で提供、(4)では大学での学びのイメージを具体化させるために、(大阪大学と統合する前の)大阪外国語大学の事例にして、学科等の枠組みを教えた上で、大学プロモーションビデオを鑑賞し、日本人学生にどのような勉強しているのかインタビューすることを夏期休暇中の課題とした。また、(5)と(6)は日本の社会習慣、社会問題を考える一例として取り上げたものであり、ここまでで、夏期休暇に入り、９月試験は、日本語能力の差そのものが、試験結果を左右しないよう、文章内の空欄を、語彙リストから埋めていく客観テストを主とした。

第２期(９月中旬から11月下旬　試験は11月末に実施)

受講者は４月時点で日本語未習者であった者でも、９月試験終了時には、日本語能力試験で言えば２級から３級の間のレベルに達していることから、この時期はより複雑な議論が可

能となる。ここでは、(7)(8)(9)の3節が取り扱われたが、これらのテーマは、①過去から現代につながる通時的話題であること、②自国の文化なり社会状況と比較、対照できる話題であること、の2点に留意して日本語上級者対象クラスでのカリキュラムと同じく、選択されたものである。

日本のテレビ文化を扱った(7)と(9)、自分たちが生まれ育った世界と比較対照しながら日本の自然観、宗教観を考えることができる(8)は、学生たちの知的好奇心を掘り起こすことには成功したが、12月に実施される試験の成績は、進学先大学決定の基礎資料となるため、基本的には、試験問題は、それぞれの節を要約することに重点を置かれ、その採点にあたっては、キーワード、キーフレーズが盛り込まれているかどうかを基準とした。

第3期(1月初旬から2月下旬　試験は2月末に実施)

第1期、第2期に対して、進学問題と関わりがなく、日本語授業も、ノートテーキング、講義聴解、レポート作成、プレゼンテーションなどのスキル養成に主眼が移る、「学部移行期」とわれわれが名づける第3期は、本センターにかつて国費日本語・日本文化研修留学生として在籍した学生の修了論文「援助交際」(全8ページ)を題材として、この読解を通して、論文の構造等を学びつつ、日本の隠れた社会問題について、自分たちと同じ留学生の目で考察を進めていき、学期末の試験も、テキストに基づきながら受講生の意見を問う論述形式のものとした。

さて、このように始まった新カリキュラムであったが、この2，3年は、学部留学生の母国における日本語学習環境の整備が総じて進んだことにより、4月来日時点における日本語未習者の数が少なくなっているため、テキスト読解の進度が一段と早まり、また、(5)「見合い結婚」、(6)「パラサイトシングル」、(10)「援助交際」は題材としても古くなり、使用を見送るようになってきた。もちろん、それに代わって、社会習慣とのつながりで「日本人の宗教観」を、そして社会的な現代事象として、「食育」や「ネットカフェ難民」等の節を追加することとしたが、9月試験においても、穴埋め問題だけでは対応できず、記述式の問題の併用も行われているのが実情でもある。

このような状況の中、前述の制約を逆に積極的に捉え、日本事情科目においても中等教育と高等教育の橋渡しとしての機能を如何に拡充していくかが問題となってきたのである。

2．新たな方向性

日本事情科目については、1962年の大学における設置認可の際に、「一般日本事情、日本の歴史、文化、政治、経済、日本の自然、日本の科学技術」といった広範な内容例示あったのみで、それが教授内容の多様性を生み出すことになったが、予備教育が大学への準備教育と重なりあうことは事実であり、その見直しの出発点は、やはり、日本における高等学校までの学習内容ということになろう。

2－1．教育項目調査

折しも、本センターでは2007(平成19)年度に、学部留学生の進学配置先大学に対する教育

項目調査を本格的に実施することになり、日本事情科目も調査対象となった。全体としての調査目的は以下の通りであった。

本学国費学部留学生の進学配置先大学教員から、所属学部・学科での勉学のために「国費学部留学生が入学時に必ず身につけているべき日本語運用能力および教科内容」「国費学部留学生が十分に身につけていない日本語運用能力ならびに学習が不足している教科内容」について意見調査を行い、1年短期の国費学部留学生予備教育で扱う教育項目の内容や優先度、学習が不足している教科内容を明らかにし、本センター学部留学生予備教育の改善を行うことを目的とする。

調査は、日本語および英語運用能力に関する調査と、「政治経済（公民）」「日本史（地理歴史）」「日本事情」「数学（数学）」「物理（理科）」「化学（理科）」6教科の指導項目についての調査から構成する。6教科の指導項目調査は、日本人学生とともに学び課程を修める学部留学生達の学習実態を、日本人学生の学習内容に即して把握するため、日本の高等学校学習指導内容に沿って調査することとする。

調査対象大学となったのは、本学国費学部留学生（1991－2005年度在籍生901名）の進学先の、2私立大学を除く39国立大学法人であり、調査方法はWEB および郵便によるアンケート調査によった。

日本事情科目については、「地理」と「現代社会」の2科目に絞り、予備教育の段階で学習が必要であると考える項目（重要度調査）並びに十分に習得されている項目（習得度調査）に、チェックを入れるというものであったが、アンケート用の項目選定に当たっては、地理関係は、中等学校段階で日本の地理的な基礎項目を学ぶことになっていることから『高等学校学習指導要領』（平成11年3月告示、14年5月、15年4月、15年12月　一部改正）の「地理歴史」によらず、『中等学校学習指導要領』（平成10年12月告示、15年12月一部改正）の「社会」に基づくこととした。

アンケート調査結果は、法学部、経済学部、工学部、理学部など、回答者の所属別にも集計されているが、ここでは大まかな傾向を知るため、文科系、理科系の小計を利用することにした。なお、下線部を除く数字は、各項目に回答した人の数を回答者総数で割ったパーセント表示となっている。

理科系分野からの回答の集計を見ると、当然と言えば当然であるが、上記の項目の重要度は、最大でも5.68%であり、重きを置かれていない。一方、文科系分野の回答では、36.26%の「日本の位置と領域」を筆頭に、20%台に「生活・文化から見た日本の地域的特色」、「現代の経済社会と経済活動の在り方」、「現代の民主政治と民主社会の倫理」、「都道府県の構成と地域区分」、そしてその直下に「自然環境から見た日本の地域的特色」、「人口から見た日本の地域的特色」、「資源や産業から見た日本の地域的特色」が続く。

こういった数字をどのように読んでいくのか、非常に難しいところであるが、便宜的に20%台までのもので区切るとするなら、ここ数年の日本事情科目で扱っていなかったのは、(1)「生活・文化から見た日本の地域的特色」、(2)「現代の経済社会と経済活動の在り方」、(3)「現代の民主政治と民主社会の倫理」の3つとなる。ただし、(2)と(3)については「政治経済」の

科目		内　　容			回答者文科系分野	回答者理科系分野
基本項目				本票回答数／回答総数→	41/93	7/88
	日本事情	世界と日本の地域構成	日本の地域構成	日本の位置と領域	36.56%	4.55%
				都道府県の構成と地域区分	21.51%	1.14%
		地域の規模に応じた調査	身近な地域		7.53%	0%
			都道府県		10.75%	0%
			世界の国々		9.68%	0%
		世界と比べてみた日本	様々な面からとらえた日本	自然環境から見た日本の地域的特色	19.35%	3.41%
				人口から見た日本の地域的特色	19.35%	2.27%
				資源や産業から見た日本の地域的特色	19.35%	5.68%
				生活・文化から見た日本の地域的特色	29.03%	2.27%
				地域間の結びつきから見た日本の地域的特色	9.68%	1.14%
			様々な特色を関連づけて見た日本		3.23%	0%
		現代社会	現代に生きる私たちの課題		6.45%	1.14%
			現代の社会と人間としての在り方生き方、	現代の社会生活と青年	11.83%	2.27%
				現代の経済社会と経済活動の在り方	22.58%	5.68%
				現代の民主政治と民主社会の倫理	22.58%	3.41%
				国際社会の動向と日本の果たすべき役割	16.13%	2.27%
			日本の大学＊		12.90%	1.14%

＊本センターの日本事情科目でこれまで扱われていた項目であるためが追加した。

科目領域と重なる部分があるため割愛すると「生活・文化から見た日本の地域的特色」のみが残る。

となれば、このテーマにそって、現在のカリキュラムに付加すべき学習内容を決めていけばよいことになるが、問題は、本センターで2003年以前に教科書として使われていた豊田豊子氏の『日本の地理と社会－日本事情テキスト』（凡人社 1996年）が扱っていた内容であり、昔に逆戻りしてしまうになるのである。経験的に言えば、「生活・文化から見た日本の地域的特色」を網羅的に取り扱おうとすればかなりの時間を要し、また、日本での生活体験が乏しい学部留学生にとっては、地域間の比較や関連づけが容易ではないため知識の定着度も低い。もし、限られた時間で、このテーマで教えるとするならば、思い切って、学生たちが予備教育段階で実際に居住する関西地域に限定する方策が必要である。そうすれば、網羅的な知識は提供できないとしても日本の他地域と比較する視座の養成にはつながると思われる。

2－2　倫理教科書の学習項目

先に述べたように、日本事情科目の教授内容見直しの出発点を日本における高等学校までの学習内容に求めたが、教育項目調査で取り上げた「地理」、「現代社会」関係のほか、ここで考察を進めたいものとして「倫理」関係分野がある。

『高等学校学習指導要領』３－２－２「倫理」においては、そのテーマとして、以下が挙げられている。

(1) 青年期の課題と人間としての在り方生き方
ア 青年期の課題と自己形成
イ 人間としての自覚
ウ 国際社会に生きる日本人としての自覚
(2) 現代と倫理
ア 現代の特質と倫理的課題
イ 現代に生きる人間の倫理
ウ 現代の諸課題と倫理

このなかの、(1) ウ「国際社会に生きる日本人としての自覚」は、人格形成重視の表現が使われているが、「日本人にみられる人間観、自然観、宗教観などの特質について、我が国の風土や伝統，外来思想の受容に触れながら、自己とのかかわりにおいて理解させ」ることを目的としており、日本事情科目の取り扱う内容に含めることは十分可能である。

無論、具体的な学習項目を考える場合には、高等学校「倫理」教科書の内容検討が必要であり、その作業のために以下の12種の文部科学省検定済高等学校公民科用教科書「倫理」を入手した。

(1) 『倫理』東京書籍（2・東書・倫理001）
(2) 『東学版 倫理』山川出版社（81・山川・倫理008）
(3) 『倫理』実教出版（7・実教・倫理009）
(4) 『倫理－現在（いま）を未来（あす）につなげる－』一橋出版（112・一橋・倫理011）
(5) 『新 倫理－自己を見つめて－』教育出版（17・教出・倫理012）
(6) 『高等学校 新倫理 改訂版』清水書院（35・清水・倫理013）
(7) 『現代の倫理 改訂版』山川出版社（81・山川・倫理014）
(8) 『改訂版 高等学校 倫理』数研出版（104・数研・倫理015）
(9) 『高等学校 改訂版 倫理』第一出版社（183・第一・倫理・016）
(10) 『倫理』東京書籍（2・東書・倫理017）
(11) 『高校倫理』実教出版（7・実教・倫理018）
(12) 『高等学校 現代倫理 改訂版－21世紀と共に生きる－』（35・清水・倫理019）

ここでは、それぞれの差異について論評することは冗長になるため差し控えるが、「国際社会に生きる日本人としての自覚」というテーマがどのように取り扱われているか、まずは (1)『倫理』(2・東書・倫理001) と (2)『東学版 倫理』(81・山川・倫理008) を例にとって、その構成を比べてみたい。なお、(1) は (10)『倫理』(2・東書・倫理017) と装丁、文字の大きさ、

行間等に違いがあるが、内容的には同じである。

『倫理』(2・東書・倫理001)	(2)『東学版 倫理』(81・山川・倫理008)
第3章　国際社会に生きる日本人の自覚 ①日本人の精神風土 1－日本人のものの考え方 2－日本人の宗教観 3－日本人の倫理観 ②外来思想と日本の伝統思想 1－仏教と日本人の思想形成 2－儒教の日本的展開 ③西洋思想と日本人の近代化 1－近代への啓蒙 2－近代的な自己の確立 3－創造的な思想 ④国際社会に生きる日本人の自覚 1－戦後思想の動向 2－国際社会での日本人 日本思想の中の人間の尊厳について	第3章　国際社会に生きる日本人の自覚 第1節　日本の風土と伝統 1　日本の風土と文化の特色 2　日本人の伝統的自然観・宗教観 3　日本人の伝統的人間観 第2節　仏教の受容と展開 1　仏教の受容 2　平安仏教 3　鎌倉仏教 4　日本文化と仏教 第3節　儒教の受容と展開 1　儒教の受容 2　日本儒学の展開 3　日本人と儒教 第4節　国学と民衆の思想 1　国学の思想 2　民衆の思想 第5節　西洋思想の受容 1　西洋近代思想の受容 2　キリスト教の受容 3　社会思想の受容 第6節　近代的自我と伝統 1　国粋主義と国民道徳論 2　近代的自我の苦悩 3　近代的自我の哲学的自覚 4　現代日本の思想状況

どちらも「国際社会に生きる日本人の自覚」は第3章に配当され、(1) は4節立てで全50頁、(2) は6章立てで全40頁であるが、一見しても、内容項目が近似していることに気づくであろう。また、(3) (6) (7) (8) (9) (11) (12) の7種の教科書についても、取り扱う分量は、最少は (3) の全30頁（だたしB5版）から最大は (8) の全54頁まで、それぞれに異なるが、独立した章立てになっており、これらもまた内容的には近似する。

例外的なのは (4) と (5) であり、(4) の『倫理－現在（いま）を未来（あす）につなげる－』では、「国際社会に生きる日本人の自覚」を独立した章立てをせずに、「思想としての知のはじまり」という章を設け、その中に「世界思想のはじまり」、「日本思想のはじまり」の二つの節を入れるなど、世界の動きと日本の動きが対照できるような構成されている。また、(5) の『新 倫理－自己を見つめて－』でも、第5章「人間を見つめて」で、「東洋における人間観の歴史」や「世界とつながる日本思想」という二節を設け、世界的な視野から日本の思想を捉え直そうとする工夫がなされている。両書は、日本の高等学校の学生にとっては好著であることは間違いないが、内容項目が分散してしまうため日本事情科目としては取り扱いにくくなるのも事実である。

そこで、(4) と (5) を除く10種の教科書の中で、最少取り扱い頁数の (3) を取り上げて、具体的な内容項目をみていきたい。

実教出版の (3)『倫理』(7・実教・倫理009) の第3章「国際社会に生きる日本人の自覚」は5節構成となっている。項目をすべて抜き出してみると以下の通りになる。

(3)『倫理』(7・実教・倫理009)	
第3章「国際社会に生きる日本人の自覚」 第1節　古代日本人の思想 1．日本人の生活と宗教観 ＊日本の風土 ＊日本の文化の基層 ＊宗教観の形成 ＊日本人の死生観 2．日本人の道徳観・自然観 ＊古代の道徳観 ＊『万葉集』の自然観 ＊『万葉集』の特色 第2節　日本の仏教思想 1．仏教の受容 ＊仏教の移入 ＊最澄と空海 ＊浄土教の展開 ＊神仏習合 2．法然と親鸞 ＊鎌倉仏教の成立 ＊専修念仏の教え－法然 ＊絶対他力の教え－親鸞 3．道元と日蓮 ＊禅宗の立場－栄西と道元 ＊日蓮 ＊鎌倉仏教の特色 4．仏教と日本文化 ＊西行の歌にみる自然観 ＊宗教の生活化・風俗化 ＊美意識と「心」重視 第3節　近世日本の思想 1．儒学の受容 ＊朱子学－林羅山と山崎闇斎 ＊中国・朝鮮・日本と儒学 ＊陽明学－中江藤樹	2．日本的儒学の形成 ＊古学の登場 ＊仁と誠－伊藤仁斎 ＊「経世済民」の儒学－荻生徂来 ＊熊沢蕃山と貝原益軒 3．民衆の思想と洋学 ＊庶民の教え－石田梅岩 ＊農民の思想－安藤昌益と二宮尊徳 ＊洋学の展開 ＊儒学の受容と儒学への反発 4．国学の形成と幕末の思想 ＊国学の成立－契沖と賀茂真淵 ＊国学の大成－本居宣長 ＊幕末の思想－平田篤胤と吉田松陰 第4節　西洋思想の受容と展開 1．西洋思想の受容（1） ＊日本の近代化と西洋化 ＊福沢諭吉と「一身の独立」 ＊中江兆民と「自由民権」 2．西洋思想の受容（2） ＊プロテスタンティズムと内村鑑三 ＊教育勅語と不敬事件 ＊非戦論と初期社会主義 3．近代思想の展開（1） ＊日本近代化の反省 ＊大正デモクラシーの思想 ＊女性解放の歩み 4．近代思想の展開（2） ＊近代哲学と伝統思想 ＊日本ファシズムとそれへの抵抗 ＊戦後の日本とその課題 第5節　多様な文化と共生の課題 ＊アジアから世界へ－天心とタゴール ＊日本民俗学と文化人類学 ＊日本文化の可能性 （付：倫理の窓　芸術の東と西）

こういった内容をすべて日本事情科目に取り込むことは時間的に言っても無理であろうが、初めに述べた第1期並びに第2期の授業において、たとえば、基層的な日本文化を学ぶという意味で、第1節「古代日本人の思想」にみられる「日本人の生活と宗教観」、「日本人の道徳観・自然観」を、また、現代日本を理解するための背景的知識の習得を目的として、第4節「西洋

思想の受容と展開」を教授するのは可能ではなかろうか。

おわりに

以上の議論を整理すると、日本事情科目の学習項目として、まず、4月から7月末までの第1期については次の5項目を挙げることができる。

「日本の位置と領域」

「都道府県の構成と地域区分」

「生活・文化から見た関西の地域的特色」

「日本人の生活と宗教観」

「日本人の道徳観・自然観」

そして、第2期（9月中旬から11月下旬）に、その分量と内容の複雑性からして、「西洋思想の受容と展開」を配当するのが適当であろう。

そうなると、「日本の位置と領域」、「都道府県の構成と地域区分」以外は、新規項目となるため、新たな留学生用の教科書開発が必要になってくるが、まずは、高等学校教科書等を使用して、来年度から試行的に授業を進めていきたいと考えている。

最後に、冒頭で述べた2つの制約から離れることができる、第3期（1月初旬から2月下旬）の学習項目についても触れておきたい。

この時期の授業においては、日本語上級者対象「日本事情科目」や国費日本語日本文化研究留学生対象「日本文化論」で扱ってきた2種のテーマ「日本のテレビヒーロー」と「日本の幽霊」を取り込む予定である。これまでに設定されてきた授業目的を挙げると、それは以下の通りである。なお、前述したとおり、2003年発行の『学部留学生のための日本事情Ⅰ』でも、(7)「ウルトラマンと仮面ライダー」や（8)「妖怪」の章として取り入れられ、第2期の授業で触れてきたが、これらに割ける授業回数は限定的で、試験も内容要約が主であったため、比較対照的な視座を養成するという意味では不十分な取り扱いしかできなかったものである。

①「日本のテレビヒーロー」

現代日本人が持つヒロイズムは、1960年代後半からテレビに登場した2大ヒーロー、ウルトラマンと仮面ライダーのイメージに大きな影響を受けたと言われる。したがって、社会の発展と共に成長し、日本人の心の中に根づいていったこれらのヒーローに着目することは、日本社会を理解するための格好の材料となろう。そこで、本授業では、テキスト購読とテレビ番組の視聴を通して、彼らの具体的なイメージを学ぶと同時に、高度経済成長期の日本人が新たなるヒーローを待望した当時の社会状況について学習する。

②「日本の幽霊」

日本では、「幽霊」は歌舞伎や落語など伝統芸能の題材として欠かすことのできないものである。この授業では、池田弥三郎、諏訪春雄両氏の著作を読むことで、民俗学的視点から日本の幽霊の特質を学ぶと同時に、その具体的なイメージを映像を通して学習する。

「日本事情」という名称が、大学の学部教育以外でも使われる以上は、その教育には王道は

ない。対象となる留学生の種別や学習条件により選択的に道を確定していかなければならないのである。

On the Teaching of *Nihonjijo* (Japanese Culture and Society) in an One-year Preparatory Education prior to Placement at University for Japanese-government-sponsored Foreign Students

（かとう　ひとし　本センター准教授）